「海と生きる」を学び，地域と共に
気仙沼・未来創造力（海洋リテラシーfor 気仙沼を含む）を育む海洋教育

気仙沼市教育委員会

１　海洋教育に取り組む背景

本市が海洋教育に取り組む背景を最もよく表したものとして，２０２１（令和３）年度作成の「海洋リテラシー for 気仙沼」前文を引用する。詳細については本章２（２）を参照願いたい。

（１）「海と生きる」気仙沼の人々のために

気仙沼で育つ子供たち，気仙沼で生きる人々，そして気仙沼の未来をつくる人々，気仙沼の様々な人々の根底には，昔も今も変わらず「海と生きる」という揺るぎないアイデンティティがある。このアイデンティティは，自覚的に意識する・しないにかかわらず，年齢，立場，職業，性別などの様々な違いを超えて，気仙沼の一人一人の中に存在している。

２０１１（平成２３）年３月に発生した東日本大震災を経て，気仙沼の人々は「海と生きる」というキャッチフレーズを復旧・復興のために掲げた。この短いキャッチフレーズは，これまでずっと気仙沼の人々の中にあった共通のアイデンティティを言葉にしたものである。そこには気仙沼の豊かな未来を描き，持続可能なまちづくりと人づくりに向かおうという決意が込められている。

私たちは，どのように「海と生きる」ことができるのだろうか。この「問い」に対する答えはいくつもあるはずである。海洋教育での探究的で協働的な学びは，これらの「問い」へ導くとともに，これからも「問い」を考えていくための足がかりとなるものである。

（２）子供たちを「海と生きる」へと導く

気仙沼市の公立幼稚園，小学校，中学校，高等学校は，これまで地域の自然や伝統文化に触れたり，基幹産業である水産業を体験したり，様々な人々とかかわったりしながら，「海と生きる」気仙沼への理解を深めてきた。地域の魅力を生かし，地域の課題の解決を考え，自分たちにもできることに取り組みながら，その地域，学校ならではの個性的で多様性に富んだ海洋教育での実践を積み重ねてきた。

気仙沼で学ぶことは，地域と海とのかかわり，人と海とのかかわりを学ぶことでもある。海についての様々な思いや生き方に向き合うことでもある。東日本大震災を経て，大人の生活は一変したが，子供たちの学びも大きく変わった。その変化を踏まえながら，どのように子供たちを「海と生きる」へいざない，導いていくのか幼稚園も学校も試行錯誤を繰り返してきた。

幼稚園と学校は，気仙沼で生きる子供たちを「海と生きる」へ招待する役割を担っている。それは，地域，人々，子供たちとともに未来の気仙沼を積極的につくっていくことでもある。幼稚園と学校は，海と生きる郷土に向き合うこと，主体的に考え行動すること，多様な人々と協働することの大切さを子供たちに伝えている。気仙沼に根差しながら協働し行動していくことが，未来の社会を人間性が生かされる持続可能な社会にするために必要だからである。

（３）未来に向かうために必要な力を育む

「海と生きる」ためには，様々な知識や技能を理解し身に付けることに加え，実践的な力が必要となる。批判的・創造的な思考力，行動力，多様性を受容すること，そして他者とのコミュニケーション力や協働性が求められる。一人一人が「海と生きる」を実現する方法や場面は様々であるため，このような力はその度ごとに異なるバランスや内実で求められ，表現される。

気仙沼という土地，歴史，文化はすべて海とつながっている。そして気仙沼での暮らしは海を介して世界とつながっている。そこで重要なのは，持続可能な生活とまちづくりである。一人一人の未来，気仙沼の未来，そして世界の人々と地球の未来を考えながら，人はどのように生き，どのようなまちづくりをする必要があるのだろうか。人と土地，そして海を取り巻く状況が日々変わり，新しい知識・技術が登場することで，未来に生かせる力を豊かにしていく必要がある。

２　海洋教育のとらえ　（※章末資料１「令和３（2021）年度気仙沼市海洋教育とその根拠・参照先」を参照）

（１）海洋基本法及び学習指導要領の側面から

２００７（平成１９）年４月に制定された「海洋基本法」の第２８条には，「広く国民一般が海洋についての理解と関心を深めることができるよう，学校教育及び社会教育における海洋に関する教育の推進等のために必要な措置を講ずるとともに，大学等において海洋に関する政策課題に対応できる人材育成を図るように努めるよう…」とある。

また，２０２０（令和２）年から順次実施された小・中学校の学習指導要領では各学校において，社会に開かれた教育課程を重視し，知識の理解の質を高め，資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」のためのカリキュラム・マネジメントの確立が強く求められている。海と人とのかかわりを考える上で，地域の文化や産業などを踏まえることや地球の環境・生命を支えているものとして海を考えることは，子供たちにより深い理解と思考を促すことにもなる。

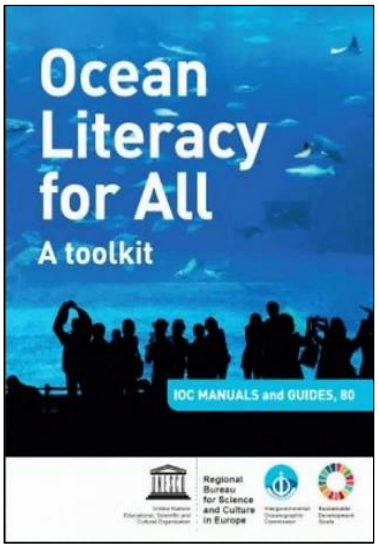
「海洋と人類との共生」という理念を掲げる海洋教育は，学習指導要領に示された，社会で生きて働く「知識・技能」，未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力等」，学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力を育み，「持続可能な社会の創り手」の育成に合致するものと言える。

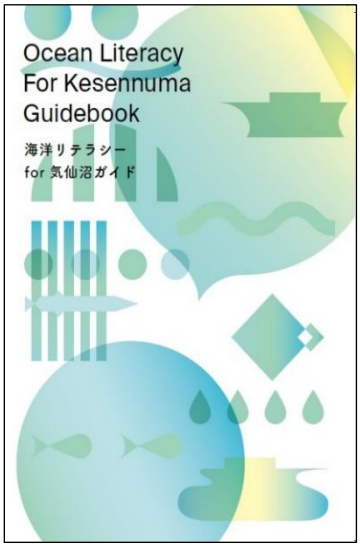
【図１：東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターＨＰから】

（２）「持続可能な開発のための国連海洋科学の１０年」及び海洋リテラシーの側面から

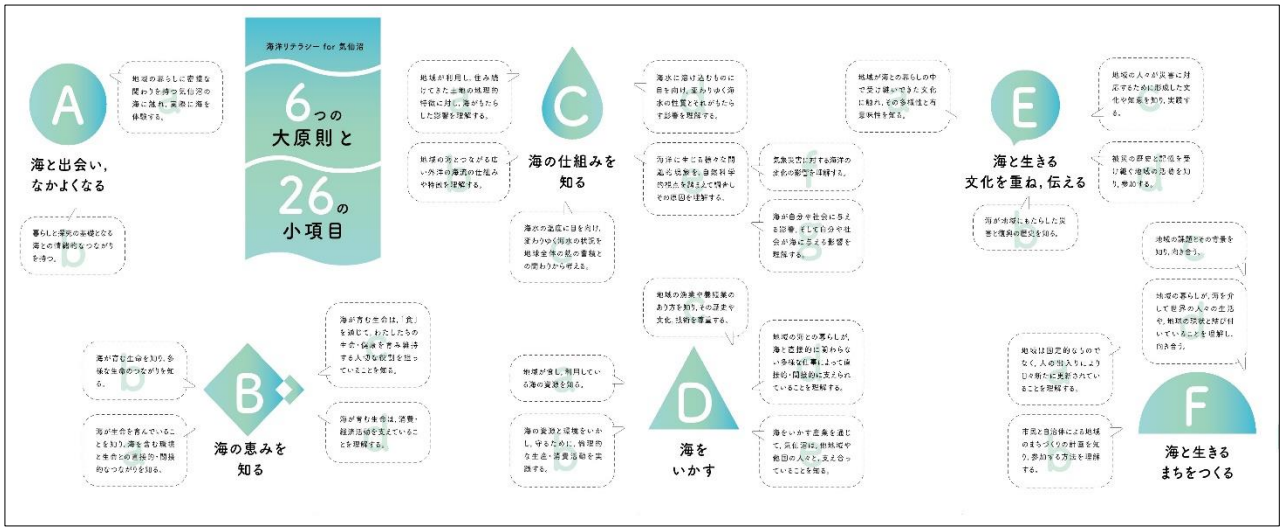
２０２１年から２０３０年までの１０年間は，「持続可能な開発のための国連海洋科学の１０年」とされ，提案したUNESCO-IOC（ユネスコ・政府間海洋学委員会）が平成２９年に刊行した『Ocean Literacy for All』に，子どもから大人までの学習者のための「海洋リテラシー」（７つの重要原理と４５の基本概念）が示された。このことは，これまで「地域のもの」として取り組まれることが多かった海洋教育を，地球規模で起こっている海洋の問題という国際的な枠組

の中に位置付けることにもなり，海洋リテラシーという観点によって，海洋教育での学びと経験は「海と人との共生」に向けての重要な意義をもつ。学校教育に期待されることは，児童・生徒に，海と人の親和性を理解する「海洋リテラシー」を育成することであり，学習を通して，海の役割や人とのつながりを理解するとともに，直面している深刻な海洋問題の解決に対応できる人材を育成することである。そこで，気仙沼市では，UNESCO-IOC による『Ocean Literacy for All』を踏まえつつ，「海と生きる」気仙沼の人々のアイデンティティと文化，海とかかわる産業と人々の生活，震災の教訓を次代に伝える防災・減災などの要素と結び付けながら，昨年度，地域の実情に合った地域版の「海洋リテラシー for 気仙沼」を作成し，それらの普及と育成に努めている。





【図２左：UNESCO-IOC（ユネスコ・政府間海洋学委員会ＨＰから，図３右：「海洋リテラシー for 気仙沼」ガイドから】



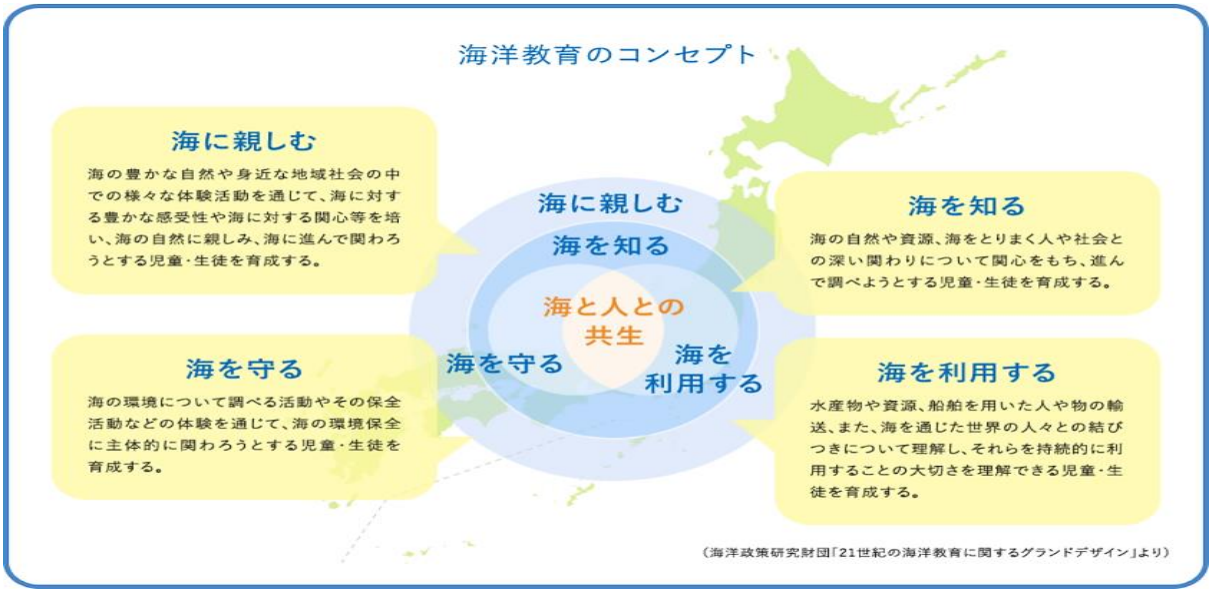
【図４：「海洋リテラシー for 気仙沼」として策定した６つの大原則と 26 の小項目】

（３）海洋教育のコンセプトと１２分野の側面から

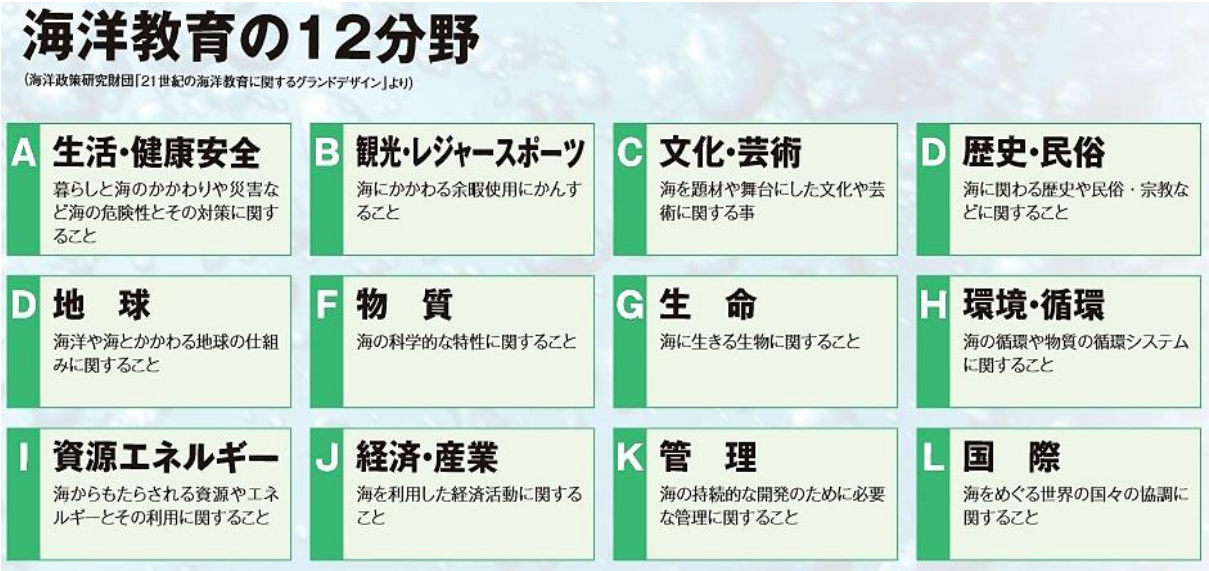
海洋教育の推進にあたり，本市では東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター（以下東京大学海洋教育センター）と市教育委員会が研究拠点としての協定（平成２６年８月促進拠点協定，平成２８年８月研究拠点協定）を結び，継続して指導・助言を受けてきた。このほかにも，気仙沼市が連携協定を結んでいる東京海洋大学のほか，市内外の海洋に関わる研究機関や市内のスローフード気仙沼，水産業関連機関・団体との多様な関わりを通して海洋教育を進めている。

下の概念図は，「21 世紀の海洋教育に関するグランドデザイン」に海洋教育のコンセプトとして示している４つ（「海に親しむ」「海を知る」「海を守る」「海を利用する」）であり，海洋

教育の１２分野（「生活・健康・安全」「観光・レジャー・スポーツ」「文化・芸術」「歴史・民俗」「地球」「物質」「生命」「環境・循環」など）に主な教育内容が整理されている。



【図５：東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターＨＰから】



【図５：東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターＨＰから】

本市の海洋教育のとらえは，（１）海洋基本法及び学習指導要領を法的な根拠としつつ，（２）国際的な潮流と課題を射程に入れるものである。なお，このとらえは（３）市内外の諸機関との連携による方向性の検討，また何よりも次章以降で示す海洋教育の具体的推進・実践を経ることによって，本市の教育に応じた形（＝（２）「海洋リテラシー for 気仙沼」）へと再構築される段階に入っている。

（４）学習指導要領に明確に位置付けられた海洋教育

学習指導要領に示されている海洋教育のねらいと位置付けについてよく表したものとして，一般社団法人みなとラボのホームページに掲載されている内容の一部を参考に引用する。

東日本大震災以降に，海洋教育の重要性に対する認識が高まり，２０１７年（平成２９年）の学習指導要領の改訂で，海洋に囲まれた国土の特徴や海洋国家としての特色，水の循環や気象と海とのかかわりなどを授業で取り上げることになるなど，海洋教育の充実が図られた。

今回のこの改訂においては，学習内容としての「海洋」が取り上げられ充実しただけでなく，新たな時代の教育を達成するために海洋教育が位置付けられた。

小学校及び中学校の「学習指導要領解説編」では，「現代的な諸課題に関する教科等横断的な教育内容についての参考資料」として「海洋に関する教育」が記載された。そこでは，「学習指導要領総則」第２に示されている「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」と，第３に示されている「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を達成するためのものとして海洋教育が記載されている。海洋と人間の共生を実現するためには，教科を横断した幅広い視点から考えることが必要である。また，共生の在り方には答えがないため，一人一人が自分事とし，対話を重ねながら実現に向けて探究していくことが必要である。このように，海洋教育は，新たな時代の教育の在り方としても求められている。(https://3710lab.com/contents/1338/)

３　気仙沼市の海洋教育の現状／２０２２年度（令和４年度）の実践概要

（１）気仙沼市の海洋教育推進体制の概要

気仙沼市は，２０１６（平成２８）年度から海洋教育パイオニアスクールプログラムの実践に継続して取り組んでいる。２０１９（平成３１）年度からの「地域展開部門（３年間）」の成果を生かし，２０２２（令和４年）は，その発展型の「地域展開・アドバンス部門」として，幼稚園５園，小学校１０校，中学校４校が海洋教育パイオニアスクールとして実践を展開してきた。

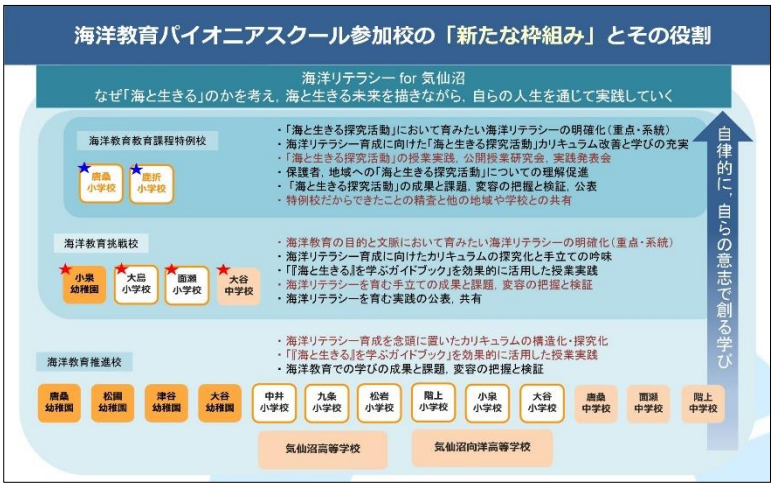
そのうち小学校２校（鹿折小学校：令和２年度から，唐桑小学校：令和３年度から）は，文部科学省より「特別の教育課程編成による教育実践校（海洋教育に関する教育課程特例校）」に指定され，新たな領域「海と生きる探究活動」を中心に教科・領域を横断させ，探究的で協働的海洋教育の推進に力を入れている。また本年度は，特例校に加えた新たな枠組みとして，「海洋リテラシー for 気仙沼」を発達段階や地域の実情に応じて育成していくという課題に挑戦的かつ重点的に取り組む海洋教育挑戦園・挑戦校（小泉幼稚園，大島小学校，面瀬小学校，大谷中学校の）を位置付け，ねらいに迫る牽引役として他の推進校のモデルとなる取組を推進している。

これらの海洋教育パイオニアスクールメンバー校のほか，県立高等学校として地域探究的なカリキュラムの中で海洋教育の実践を行っている気仙沼高等学校と，水産業を支える情報海洋や産業経済などの学習を展開している気仙沼向洋高等学校が加わり，海洋に関する教育推進の方向性を共有しながら，取組を充実させるための連携に努めている。

【図６：幼稚園・学校の多様なつながりによる海洋教育の推進体制】

（２）気仙沼市海洋教育推進連絡会・推進委員会

気仙沼市海洋教育推進連絡会（以下連絡会）は，市立幼稚園から市内高等学校までの海洋教育パイオニアスクールと海洋に関する学習を展開する学校，東京大学海洋教育センター／一般社団法人みなとラボを中心に，必要に応じて東京海洋大学関係者，地域の教育に関する有識者等の参加により組織している。この連絡会は，海洋教育の目的と方向性等を共有するとともに，それぞれの実践について情報交換したり学び合ったりする場であり，本市海洋教育の土台となる組織である。



【図７：2022 年度の海洋教育推進体制の「新たな枠組み」】

実施回	期日	研修講話タイトル	講師
第１回	5/12(木)	海洋教育のビジョン	東京大学海洋教育センター 教　授　田中 智志 氏
第２回	6/28(火)	海洋酸性化のはなし	東京海洋大学学術研究院 准教授　川合美千代 氏
第３回	9/1(木)	我が国の小学校における海洋教育現場の課題 ～実践報告のテキストマイニングによる分析結果～	笹川平和財団海洋政策研究所 研究員　小熊 幸子 氏
第４回	10/21(金)	100 年先を見据え，みらい造船がえがく未来と私が描く夢	株式会社みらい造船 広報担当　梶原 美羽 氏
第５回	1/20(金)	海洋教育と道徳教育 ～海洋リテラシーfor 気仙沼と道徳科のつながり～	東京大学海洋教育センター／みなとラボ 特任研究員　梶川　萌 氏

【図８：2022（令和４）年度海洋教育推進連絡会で行った研修講話（計５回）一覧】

気仙沼市海洋教育推進委員会（以下推進委員会）では，海洋教育の目的と方向性，学習指導要領に示されている主体的・対話的で深い学びを実現する学習の在り方について議論する場である。本市海洋教育の目的を明確にしながら，推進連絡会と連動させている。本年度は，「海洋リテラシー for 気仙沼」の内容を発達段階に応じてより捉えやすく，扱いやすいものとするために，幼稚園から中学校までの系統的なつながりを大原則毎に検討し，推進委員会（案）として仮置きした。また，海洋教育副読本『「海と生きる」を学

【図９：海洋教育推進委員会／推進連絡会の関係と 2022 年度の実施経緯】

ぶガイドブック～未来をえがくわたしたち～』活用例として，推進委員がそれぞれ所属する幼稚園，小・中学校において先行して実践したモデル事例集を作成し，連絡会において副読本の授業活用の参考として紹介した。

気仙沼市海洋教育副読本（「海と生きる」を学ぶガイドブック～未来をえがくわたしたち～）活用実践記録　【気仙沼市立小泉幼稚園】

学年	単元名（教科・領域）	単元のねらい	既存の授業実践と副読本との接続の発見
年長	海洋教育子どもサミットｉｎ小泉海岸 （　海を通した幼稚園交流　）	○海に対する親しみの気持ちをもち，五感を活用しながら夢中になって遊ぶ楽しさを味わう。（健康・環境・表現） ○砂の感触や海水（波）の感触を味わい，様々な気付きや発見を楽しみながら，好奇心や探求心を高める（環境・言葉・表現） ○遊びを通して同年代の友達とのふれ合いを楽しみ，一緒に見たり触れたり試したりして遊ぶことを楽しむ。（人間関係・言葉・表現）	幼稚園教育要領に示される５領域との関連を基に実施する活動（遊び）が，副読本の実践例と大きく関わっていることから，「遊びを通した学び」に向けた環境構成や援助において参考にすることができる。

展開	主な学習活動	活用の仕方／活用上の留意点	副読本活用のねらい・効果	活用する内容・機能・ページ
導入（問い）	【小泉海岸のわくわくを教えよう！】 1　子どもサミット開催に向けた事前散策「小泉海岸わくわく探検！」 2　市内公立幼５園の年長児とのリモート交流　「一緒に遊ぼうね！」	○幼児が海とどのような出会い方をするかによって，興味や関心のもち方が大きく違ってくることから，各章に挙げられている“ポイント”を参考に声掛けする。 ○幼児の気付きや発見を受け止め思いを共有することで，地域の海への関心と親しみの気持ちを高める。	○砂浜で夢中になって遊ぶことを通して，地域の海に対する親しみの気持ちをもつ。 ◎海で遊び，見たり気付いたりした体験を様々な友達に伝えたことは，地域の海への親しみの気持ちが更に高まるきっかけとなった。	○A章 海と出会い，なかよくなる P７　図表 「海と出会う手がかり」 各園・各校の活動例
展開（探究）	【海洋教育子どもサミット ｉｎ小泉海岸】 3　なかよしタイム① 「小泉海岸のわくわくを教えよう」 4　みんなで遊ぼう！ 「いろいろな友達と一緒に，砂浜遊びを楽しもう」 5　なかよしタイム② 「砂浜遊びの振り返りをしよう」	○自分たちが知っている「小泉海岸のわくわく」を伝えることで，地域の海の魅力を友達と共有できるような声掛けをする。 ○幼児が海とどのような出会い方をするかによって，興味や関心のもち方が大きく違ってくることから，各章に挙げられている“ポイント”を参考に声掛けする。 ○幼児の気付きや発見を受け止め思いを共有することで，地域の海への関心と親しみの気持ちを高める。	○海水の気持ちよさ，波の動きや砂から湧き出る海水の不思議さに触れ，見たり触れたり試したりして遊ぶ。 ○磯の匂いや風の心地よさを肌で感じたり，広い砂浜の美しさに気付いたりする。 ○友達と一緒に夢中になって遊ぶ楽しさを味わいながら，様々な発見や気付きを楽しみ，好奇心や探求心を高める。 ◎様々な発見や気付きを友達と共有しながら夢中になって遊んだことで，地域の海への関心が大きく膨らんだ。楽しかった海との出会いが今後の様々な学びの土台につながると考える。	○A章 海と出会い，なかよくなる P７　図表 「海と出会う手がかり」 各園・各校の活動例 ○B章 海の恵みを知る P８　海が育む生命（生き物）を見つけよう ＊コラム　P１５・P２３
まとめ（深化・発展）	6　海ごっこをしよう！ 「わくわく小泉海岸をつくろう」 7　海の博士に聞いてみよう！ 「気付きや疑問について調べたり聞いたりしてみよう」	○体験から得たことを表現して遊ぶ過程を大切にし，年少児や年中児に伝えたり，疑問に思うことを関係機関の方に聞くことができるようつないだりする。 ○楽しかった思いに共感しながら，地域の海への関心と親しみの気持ちを高めていく。	○気付いたことや感じたこと，疑問に思ったことを言葉で伝えたり，様々な方法で表現したりする。 ◎楽しかった思いを遊びに生かしたり疑問を解決したりする過程を通して，体験から得た学びを確かなものとして捉えることができ，海への関心が更に広がったと感じる。	○A章 海と出会い，なかよくなる P６　図表 「人々の話を聞いてみる」 P７・P９　各園・各校の活動例

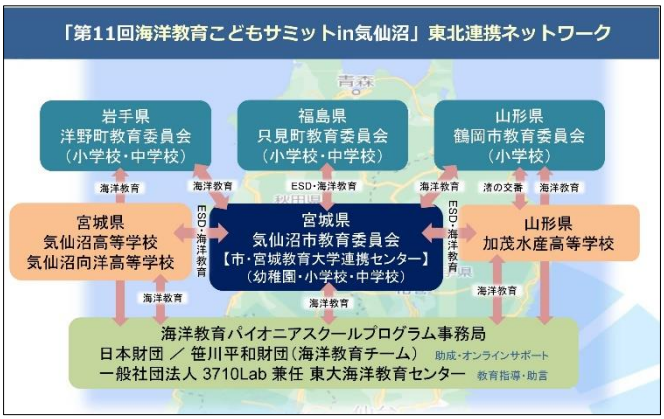
実践を振り返って

幼児が主体的に活動（遊び）に取り組む過程を通して５領域のねらいが総合的に達成されるための環境構成や援助を行う上で，副読本を活用しながらどのように海洋リテラシーを育むかを考えた。副読本の活用については，教師が活用しながら保育に生かしていくこととした。また，海洋リテラシーfor気仙沼を更に幼稚園教育に取り入れていくために，海洋リテラシーfor小泉幼稚園版を作成し，教師間で共通理解の基実践したことで，地域環境の一つとしての“海との出会い”が幼児の遊びを大きく広げ，「楽しい」「なぜだろう？」「もっと知りたい」の思いを抱きながら遊ぶ姿につながったと考える。これらの体験の積み重ねは，小学校以降の海洋教育の土台としてつながると考えることから，今後も，幼児の心の動きや思いを大切にしながら，気仙沼の様々な海や海に関わるひと・もの・こととの様々な出会い方・親しみ方を探っていきたい。

【図 10：「海と生きる」を学ぶガイドブック活用事例（幼稚園の一例）】

（３）「第 11 回海洋教育こどもサミット in 気仙沼（オンライン大会）」の開催

２０１６（平成２８）年度から，東北地方で海洋教育に取り組んでいる幼稚園から高等学校が一堂に会して実践を伝え合い，テーマに沿った対話による学び合いを行う「海洋教育こどもサミット」を開催している。２０１６（平成２８）年度は気仙沼市（面瀬小学校）で，２０１７（平成２９）年度と２０１９（令和元）年度は岩手県洋野町で，２０１８（平成３０）年度は気仙沼市（鹿折小学校）で，２０２０（令和２）年度からは新型コロナウイルス感染拡大防止のため，気仙沼市や東京大学海洋教育センターがホストとなりオンラインで開催している。



【図 11：海洋教育こどもサミット東北連携ネットワーク】

【図 12：オンラインでの海洋教育こどもサミット】

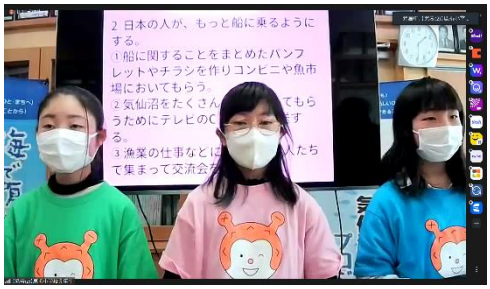
本年度は，気仙沼市教育委員会が主催となり，「第 11 回海洋教育こどもサミット in 気仙沼（オンライン大会）」を，気仙沼市立小学校１０校と中学校４校，高校２校，岩手県洋野町の小・中学校１１校，福島県只見町の小・中学校３校，山形県鶴岡市の小学校１校の計３２校の児童・生徒が参加して１１月２５日（金）に開催した。学びの深め合いテーマや論点，展開の仕方等に関しては東京大学海洋教育センター／一般社団法人みなとラボから，オンラインの運営に関しては笹川平和財団海洋政策研究所からサポートを得ながら準備と調整，当日の運営を行った。

今回は初めての試みとして，全てのグループを小・中・高校混合による異校種編成とし，実践発表と学び合いのセッションでは発表と質疑応答の進行を中学生が務めた。また，学びの深め合いのセッションでは，「未来で海と生きるために，必要なことは何だろう？」をテーマに高校生がファシリテーターを務め，一人一人が思い描く「必要なこと」を予め書いておいたフリップパネルを見せ合いながら互いの考えを多面的・多角的に交流し，深め合うことができていた。サミット運営の大半を児童・生徒が担い，こどもサミットにふさわしい画期的な内容となった。

【図 13：「海洋教育こどもサミット in 気仙沼」での異校種による発表と学び合い／学びの深め合いでの考えの交流】

（３）全国海の学びの発表交流会２０２２

昨年度まで毎年行われてきた「全国海洋教育サミット」の後継として，２月４日（土）に「全国海の学びの発表交流会２０２２」（主催：日本財団・笹川平和財団海洋政策研究所）がオンラインで開催され，本市からは鹿折小学校の５年児童３名が参加した。「なぜ気仙沼の水産業に関わる人に外国人が多いのだろう？」をテーマに，魚市場やマグロ延縄船，造船所などの見学や新内の会社で働くインドネシア出身者との交流会を通じて学んだことをもとにしながら，テーマ設定の理由と問題点，誇りなどの視点から発表した。学びの先にあったものとして，日本の漁業の未来が決して明るくはないことや気仙沼の人たちも真剣に後継者不足について考えなければならないことなど，気仙沼の水産業と外国とのつながりだけでなく「気仙沼の水産業の未来」についてしっかりと向き合っていくことが大切であるという新たな課題の発見による多角的で深い学びへと展開されていた。気仙沼を含め，秋



【図 14：全国海の学び交流会での鹿折小の発表】

田市の小学校，島根村と駒場の中学校，駒場と逗子の高校など全６校による９つの実践発表や研究発表と感想共有による交流が行われた。

（４）地域別発表会・交流会の開催

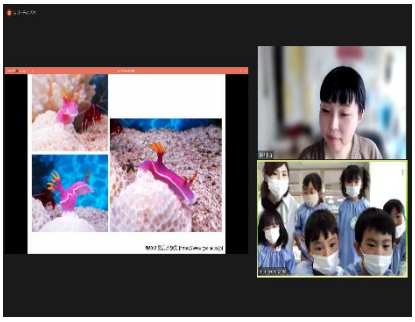
①　市立幼稚園（唐桑幼・松圃幼・津谷幼・小泉幼・大谷幼）「海洋こどもサミット in 小泉海岸」

本年度，海洋教育メンバー校に新たに津谷幼稚園が加わり，２回目となる「海洋こどもサミット」を小泉海岸において５園合同で実施した。①海に対する親しみの気持ちを持ち，五感を活用しながら夢中になって遊ぶ楽しさを味わうこと，②砂の感触や海水（波）の感触を味わい，様々な気付きや発見をしながら好奇心や探究心を高めること，③遊びを通して同年代の友達との触れ合いを楽しみ，一緒に見たり触れたり試したりして遊ぶことを楽しむことをねらいとした。

ＩＣＴも積極的に活用し，事前にオンラインで紹介し合い，事後には「海の博士」（一般社団法人みなとラボの梶川先生）にオンラインで質問をしたり，絵に表したりするなど，遊びと学びを広げ，深めることにつながるサミットとなった。今後は海や川での活動を含め，５園合同・連携による活動を無理のない範囲で増やし，触れ合える機会を設けていきたいと考えている。

【図 15：オンラインでの紹介】

【図 16：他園の友達と海で交流】



【図 17：「海の博士」に質問】

②　鹿折小学校「海洋フォーラム in 鹿折 2022」（海洋教育に関する教育課程特例校）

鹿折小学校では，２０１８（平成３０）年度より「海洋フォーラム in 鹿折」を開催している。本年度は１２月１６日（金）に対面形式で，特例校３年目となる「海と生きる探究活動」において３～６年生が取り組んできた成果を，虎舞やプレゼン掲示，個人・グループ探究で発表した。

海と人々の暮らし・世界とのつながり，地球温暖化と海面上昇，食品ロス削減やスローフード活動など，一人一人が問題意識をもったことをテーマに多様な視点から捉えた発表が各ブースで展開されていた。発表後には，地域や企業の方々，大学等の研究者も各グループに参加し，産業，環境，まちづくりなどの視点から，「海と生きる」気仙沼のあるべき姿について活発な意見交流がなされていた。当日視聴していただいた（株）臼福本店の臼井壯太郎社長，国立極地研究所の丹羽淑博特任研究員，東京大学海洋教育センター／一般社団法人みなとラボの田口康大特任講師から指導助言やコメントをいただき，「海と生きる」への考えを深め，海と人との共生を目指す気仙沼のために自ら行動できる児童を育む学びへとつながるフォーラムとなった。

【図 18：「海と生きる」を語り合う】

③　唐桑小学校「第６回リアスサミット in 唐桑」（海洋教育に関する教育課程特例校）

唐桑小学校では，生活科や総合的な学習の時間等における地域を題材とした体験的・探究的な学びの成果を，保護者や地域の方々に発信する場として「リアスサミット in 唐桑」を毎年開催しており，本年度は１２月１６日（金）に行った。「ふるさと唐桑のまちの未来」をテーマに，カキ養殖の歴史や地球温暖化の影響，郷土料理，鮪立大漁唄い込みなど，特例校２年目としての成果をポスターやタブレット等で発表した。唐桑地区で体験活動などに協力いただいている地域支援者の方々や市探究学習コーディネーターからも適宜コメントやアドバイスを受けながら学習を深めることができていた。本年度も，市内山間部にある月立小学校の５・６年生が会場参加し，環境問題や観光などに関しての地元の現状を見つめ，マイバッグ使用やゴミ削減，特産品ＰＲポスターの作成などを提案するとともに，対面によるワークショップでの意見交流を通して未来の地域の姿を互いに思い描く交流となっていた。

【図 19：探究したことをプレゼン発表】

④　大島小学校「第７回海洋教育発表会」（海洋教育に関する挑戦校）

大島小学校では，２０１６（平成２８）年度より「大島小学校海洋教育発表会」を開催しており，本年度は２月２８日（火）に，保護者と大島漁業協同組合青年部の方々，市内小・中学校の教員を招いて，３年ぶりに体育館で開催した。海洋教育担当教諭の概要説明に続き，「大島の海の豊かさを感じて」「大島の海を見つめて」「大島の海と生きる」の各テーマのもと，４～６年生が発表した。ワカメ，カキ，ホタテといった養殖体験を切り口にしながらも，生産に携わる人々の知恵と工夫，環境と生育，オリジナル料理と栄養，まちづくりに向けて自分たちで考えたアイディア提供など，養殖の先を考えた広がりと深まりが見られていた。漁協青年部による支援を含め，学校と地域の一体感を感じる発表会であった。

【図 20：養殖体験での学びを発表】

（５）教職員地域研修会の実施

気仙沼市では，初めて市内小・中学校に勤務する教職員を対象に，地域理解を深め指導に生かすことを目的とした地域研修会を長きに渡り実施している。本年度も５月１７日（火）・２０日（金）に，海洋教育の基本理念であり，気仙沼市の復興キャッチフレーズでもある「海と生きる」を知る研修を行った。気仙沼魚市場・水産情報等発信施設（水産振興センター）を見学した後，マグロ延縄船の第８昭福丸に乗船し，（株）臼福本店の臼井壯太郎社長から，気仙沼の漁業の現状と課題，ＭＳＣ認証取得による持続可能な漁業に向けた決意と生態系に配慮した取組についての講話をいただいた。複数の班に分かれての船内見学や新任教員と同年齢の若手漁船員の初航海に向けて抱く

【図 21：マグロ船への乗船体験研修】

夢と志についての話を聞くこともできた。参加者一人一人が「問い」をもって臨み，震災後の気仙沼の復旧・復興の状況と気仙沼の基幹産業である水産業が抱える魅力と課題等への理解を深め今後の指導に生かすための貴重な研修となった。

５　「海洋と人類との共生」の実現に向けて「海洋リテラシーfor 気仙沼」を育む海洋教育の推進

「海と生きる」気仙沼にとって，「海」は食，観光，産業，文化，まちづくり等，人々の生活と切り離すことができない存在であり，気仙沼の人々が考え，生きていくための拠り所でもある。この「海と生きる」を学ぶ対象の「海」は，教員にとっても子供たちにとっても馴染みやすい姿で間近に存在し，意義ある地域教材として扱われている。東日本大震災で海の畏れを体験した私たちは，ふるさとの復興と創造への術（すべ）としての海に向き合い，海とのつながりを大切に，海と人とが共生する未来を描きながら「気仙沼・未来創造力（海洋リテラシー for 気仙沼を含む）」を育み，持続可能なまちづくりとそれを担う人づくりを目指している。

２０１４（平成２６）年度に市立小・中５校と２団体によってスタートした本市の海洋教育は，その後海洋教育パイオニアスクールプログラム（地域展開部門）参加による助成を得ながら，幼稚園，小・中学校，高校の２１校による連絡会での展開へと広がった。それぞれの発達段階に応じた取組，地域の特色を生かした体験による取組，他地域や他国・大学等の専門機関とつながる取組とともに，教科横断的な取組，探究的（個別最適で協働的）な取組など多様な実践を通して質的な面でも成果を上げている。２０２１年，UNESCO-IOC（ユネスコ・政府間海洋学委員会）による国際的な「持続可能な開発のための国連海洋科学の１０年」がスタートし，本市でも本年度は「アドバンス部門」での新たなフェーズに挑戦的に取り組んできた。

この先を見据え，本市ならではの提案性と先進性を生かし，「海洋と人類の共生」という大きな課題の実現に向けて「海洋リテラシー for 気仙沼」を身に付けた人，すなわち，“なぜ「海と生きる」なのかを考え，海と生きる未来を描きながら，自らの人生を通じて実践していく人”を育むパイロット地域の基軸としての海洋教育を一層充実させ，発展させていきたい。

【図 22：海洋教育副読本「海と生きる」を学ぶガイドブック／ガイドブックのガイド】

【資料１】2021（令和 3）年度からの気仙沼市海洋教育とその根拠・参照先の整理

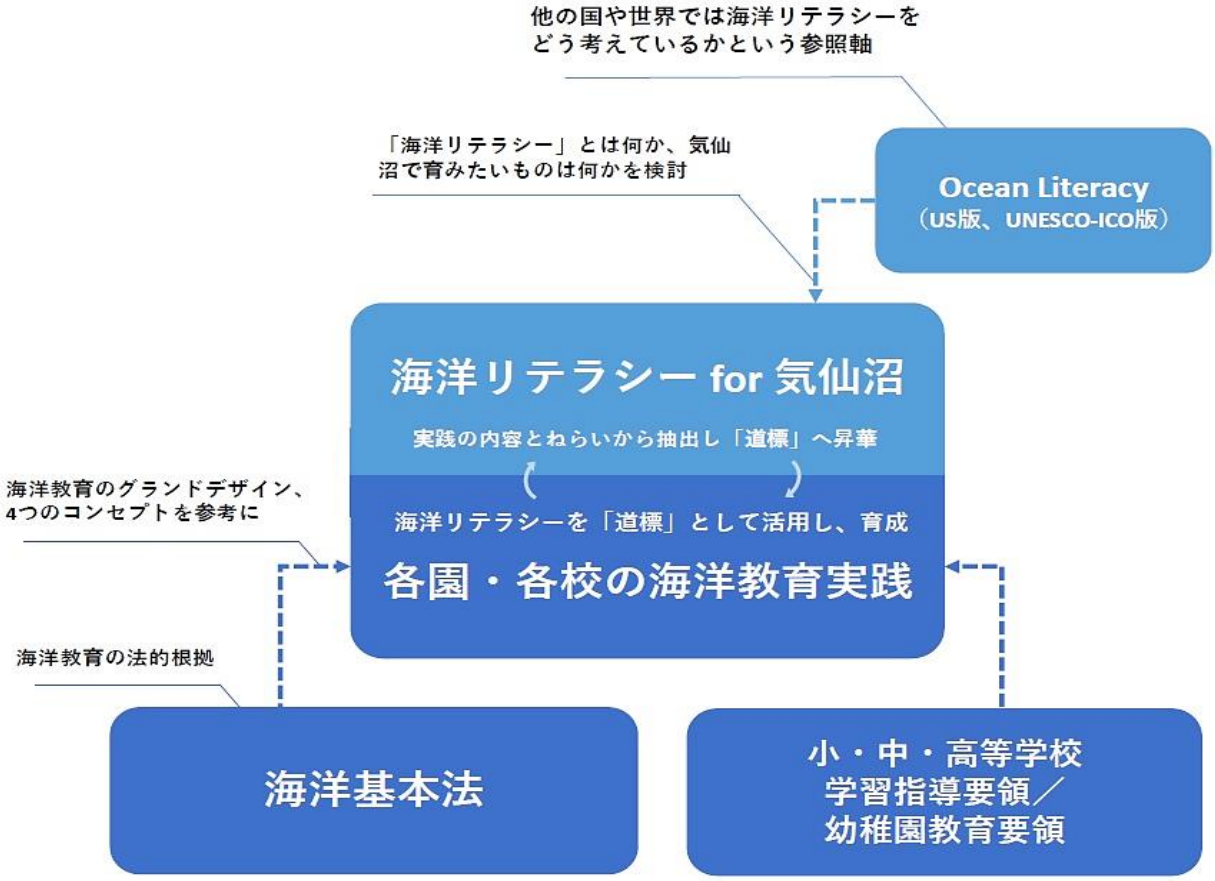
■ 「海洋リテラシー for 気仙沼」は，気仙沼のものとして洗練された包括的な位置にある。そのため，「21 世紀の海洋教育に関するグランドデザイン（小学校編）」（2009.3 海洋政策研究財団）に示されている 4 つのコンセプト（海に親しむ，海を知る，海を守る，海を利用する）や内容領域については，この実践記録集ではこれまで重ねた実践の参考として整理してある。

■ ２０２１（令和３）年度の気仙沼市海洋教育推進委員会と気仙沼市海洋教育副読本編集委員会，気仙沼市教育委員会において，US 版「Ocean Literacy*」や学習指導要領と照らし合わせながら気仙沼のものとして検討・整理し，反映したものである。

*）US 版の海洋リテラシーが記載された際の文献名は以下

Ocean Literacy: The Essential Principles and Fundamental Concepts of Ocean Sciences for Learners of All Ages　（2005 年初版、2013 年第 2 版、2020 年第 3 版）

■ 本市海洋教育の中核に位置付く「海洋リテラシー for 気仙沼」を育むという目的に向けた具体的な学習活動として各園・各校の海洋教育実践が行われることが重要である。それらの実践一つ一つが「海洋リテラシー for 気仙沼」を体現し，『「海と生きる」を学ぶガイドブック』は，その教育的効果を一層高める指導と学びのガイドとして活用するものである。



【図 23：2021 年度からの気仙沼市海洋教育とその根拠・参照先の整理】

【資料2】「気仙沼・未来創造力」／「海洋リテラシー for 気仙沼」／ 「海と生きる」を学ぶ探究スパイラル 等

震災復興キャッチフレーズ「海と生きる」は気仙沼人のアイデンティティ

先人たちはこれまで何度も津波に襲われても，海の可能性を信じて再起を果たしてきた。

人智の及ばぬ壮大な力としてしながらも，海を敵視せず，積極的に関わり合って暮らしてきた。

それは単に「海で」生活していたのではなく，人間は自然の一部であることを経験的に体得し，対等の関係を築いて「海と」生活していたとも言える。

その態度が自然観や運命感，ひいては死生観となった。気仙沼の観念は海にある。

いまを生きる世代が再び海の可能性を信じ，復興を成し遂げることが，犠牲者への供養となり，次世代への希望となろう。

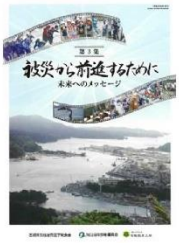
理念を超えた観念をメッセージ化したものが「海と生きる」である。

（2011年10月 気仙沼市震災復興市民委員会において策定）

海と人との共生（海と生きる地域，海と生きる環境，海と生きる産業，海と生きる自分，未来）

震災からの復興教育，教育の創造的な復興，そして発展

H26「被災から前進するために～未来へのメッセージ～（第3集）」より



1 地域と連携し危機対応能力を育む教育
→ 自助・共助・公助のサイクル，地域と共に防災・減災教育を充実

2 自然との共生をめざす教育
→ 海の恵みを享受，自然と共生した暮らしやまちづくりを志向

3 故郷の心を受け継ぐ教育
→ 地域への誇りや愛着を醸成，気仙沼人としてのアイデンティティの確立

4 地域や国境を越えた学びの共有
→ グローバルな学びの場，コミュニケーション能力や国際的な視野

5 未来を創る教育
→ 夢と志，未来をデザインする力，レジリエンス（しなやかな心），エージェンシー

● ESDを通した1～4の実践（震災前・直後から）

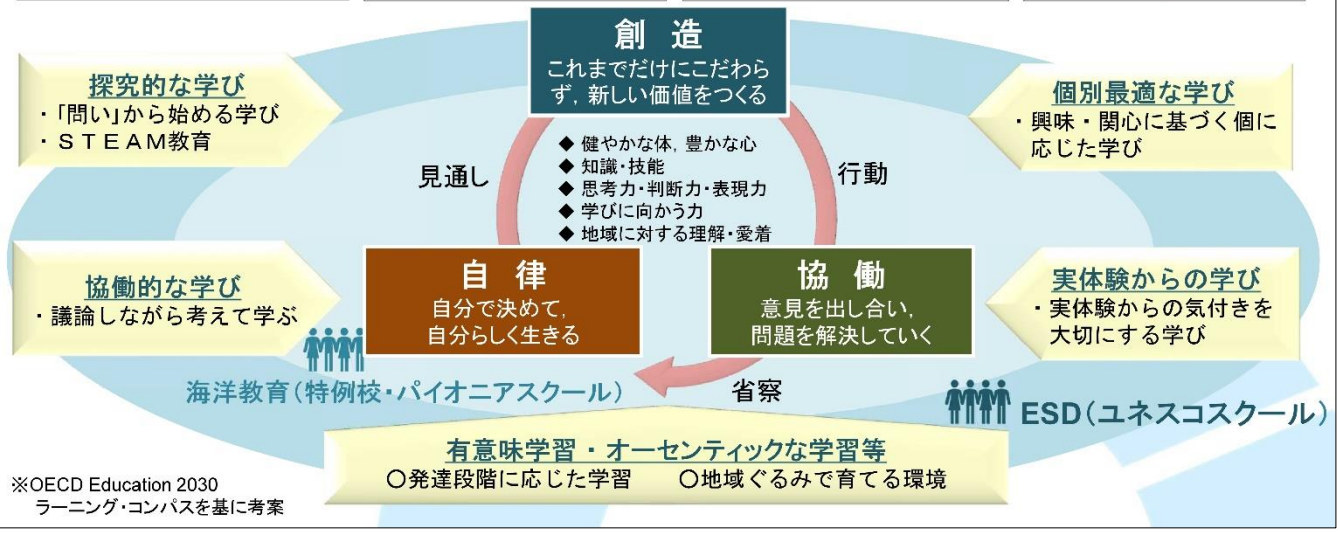
→ 今，未来を創る教育へ → 「気仙沼・未来創造力」を育む

より良い未来を創造する力を育む気仙沼の教育（ESD・海洋教育が基盤）

気仙沼・未来創造力　「世界とつながる，豊かなローカル」➢（第2次市総合計画基本構想 将来像）

海と生きる郷土を思い，自ら考え主体的に行動し、多様な人々と協働して、人間性が生かされる持続可能な社会へと責任を持って変革していく力　（※ 海洋リテラシー for 気仙沼を含む）

F（Foresight）先を見渡す力　I（Insight）本質を見抜く力　S（Strategy）道を切り拓く力　H（Harmony）つなぐ力



※OECD Education 2030
ラーニング・コンパスを基に考案

気仙沼のESD・海洋教育の提案性と先進性

1　地域に根差した体系的で探究的な海洋教育プログラムの開発と実践

➡ 地域に根差した教育，地域から視野を広げる教育，地域をつなぐ教育，地域を拓く教育

2　ESD推進の知識ベースとなる地域・大学・専門機関との連携の構築

➡ 本物に出会い正しく知る（知識・価値等），深く思考する（批判的・多面的等），有機的につながる（ネットワーク）

3　幼稚園・小学校・中学校・高校の連携による系統的な海洋教育の実践

➡ ガバナンスで（理念），コンピテンシーで（資質・能力），コンテンツで（内容），メソッドで（手法・方策）

4　他地域や海外の学校との共同学習による地球的視野の育成

➡ Think Globally，Act Locally　Think Future，Act Now，　高次元のユネスコスクールネットワーク（ASPnet）

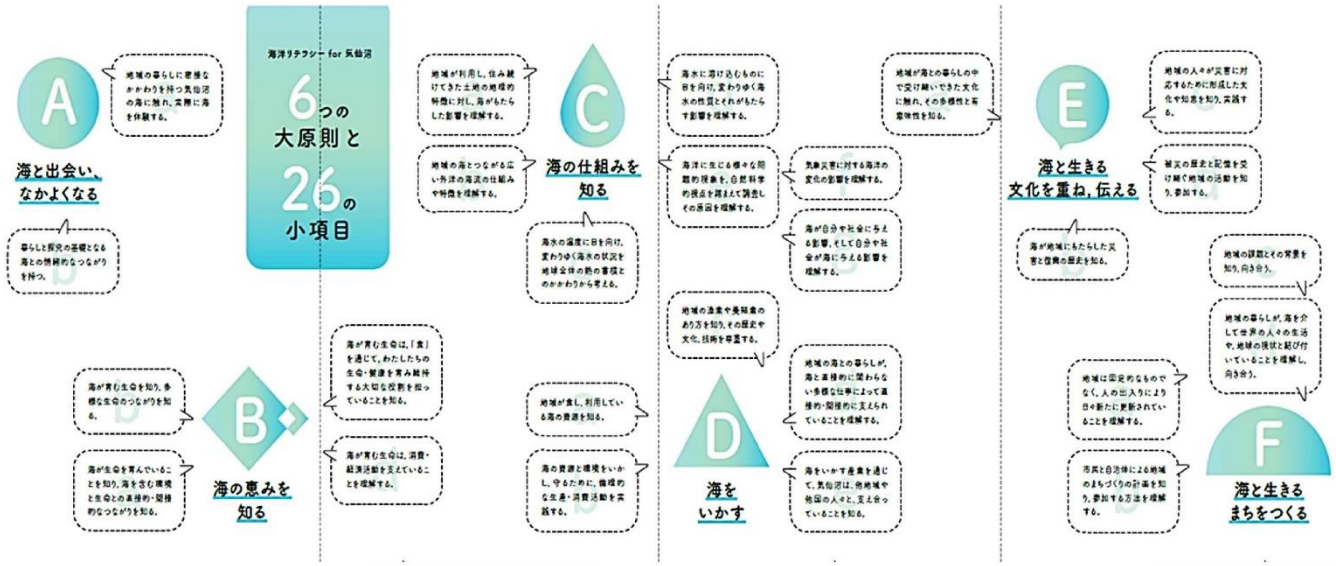
5　ICTを活用した時間と空間を超えた「学びの共有」の実践

➡ 個別最適（自律的）な学びと協働的（対話的）な学び，Input／Communication／Outputの共有ネットワーク

「海と生きる」学びを通して育む「海洋リテラシー for 気仙沼」

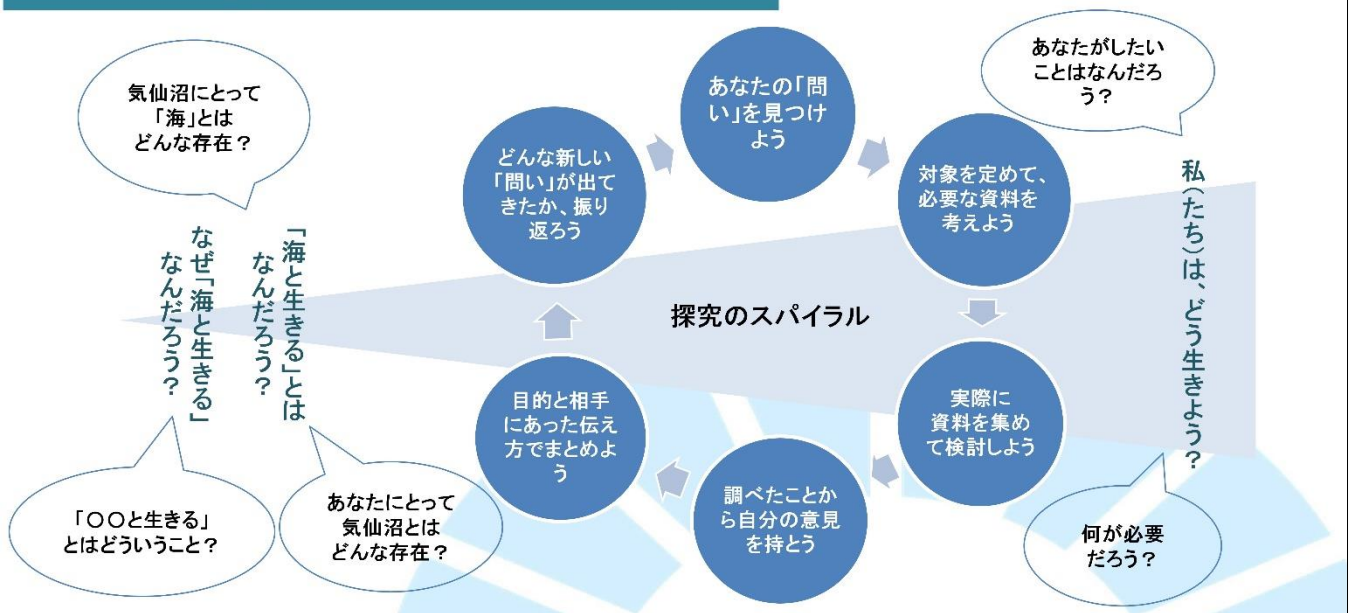
海洋リテラシー for 気仙沼

なぜ「海と生きる」のかを考え，海と生きる未来を描きながら，自らの人生を通じて実践していく人を，気仙沼では海洋リテラシーを身に付けた人と呼ぶ。



海と生きるを学ぶ「問い」を探究し，自分事として，深く考えるために

「海と生きる」を学ぶ探究的な学習スパイラル



- 「海と生きる」とはなんだろう，なぜ「海と生きる」なんだろう，といった大きな問いは，探究のスパイラルとつながっている。
- 子供たちの探究は，大きな問いに向き合うための大切な手がかりとなる。

「海洋リテラシー for 気仙沼」の縦のつながり（系統の目安）R4仮置き

<table>
<tr><th>リテラシー
（大原則）</th><th>A海と出会い，なかよくなる</th><th>B海の恵みを知る</th><th>C海の仕組みを知る</th><th>D海を活かす</th><th>E海と生きる文化を
重ね，伝える</th><th>F海と生きるまちをつくる</th></tr>
<tr><td>小項目</td><td>a 地域の暮らしに密接なかかわりを持つ気仙沼の海に触れ，実際に海を体験する。
b 暮らしと探究の基礎となる海との情緒的なつながりを持つ。</td><td>a 海が生命を育んでいることを知り，海を含む環境と生命との直接的・間接的なつながりを知る。
b 海が育む生命を知り，多様な生命のつながりを知る。
c 海が育む生命は。「食」を通じて，わたしたちの生命・健康を育み維持する大切な役割を担っていることを知る。
d 海が育む生命は，消費・経済活動を支えていることを理解する。</td><td>a 地域が利用し，住み続けてきた土地の地理的特徴に対し，海がもたらした影響を理解する。
b 地域の海とつながる広い外洋の海流の仕組みや特徴を理解する。
c 海水の温度に目を向け，変わりゆく海水の状況を地球全体の熱の蓄積とのかかわりから考える。
d 海水に溶け込むものに目を向け，変わりゆく海水の性質とそれがもたらす影響を理解する。
e 海洋に生じる様々な問題的現象を，自然科学的視点を踏まえて調査しその原因を理解する。
f 気象災害に対する海洋の変化の影響を理解する。
g 海が自分や社会に与える影響，そして自分や社会が海に与える影響を理解する。</td><td>a 地域が食し利用している海の資源を知る。
b 海の資源と環境をいかし，守るために，倫理的な生産・消費活動を実践する。
c 地域の漁業や養殖業のあり方を知り，その歴史や文化，技術を尊重する。
d 地域の海との暮らしが，海と直接的に関わらない多様な仕事によって直接的・間接的に支えられていることを理解する。
e 海をいかす産業を通じて，気仙沼は，他地域や他国の人々と，支え合っていることを知る。</td><td>a 地域が海との暮らしの中で受け継いできた文化に触れ，その多様性と有意味性を知る。
b 海が地域にもたらした災害と復興の歴史を知る。
c 地域の人々が災害に対応するために形成した文化や知恵を知り，実践する。
d 被災の歴史と記憶を受け継ぐ地域の活動を知り，参加する。</td><td>a 地域は固定的なものでなく，人の出入りにより日々新たに更新されていることを理解する。
b 市民と自治体による地域のまちづくり計画を知り，参加する方法を理解する。
c 地域の課題とその背景を知り，向き合う。
d 地域の暮らしが，海を介して世界の人々の生活や，地球の現状と結び付いていることを理解し，向き合う。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">幼稚園</td><td colspan="3">a 気付きや発見を楽しみながら夢中になって遊び，五感を使って様々な感覚を楽しんでいる。</td><td colspan="3">D－f 海の宝物（漂着物）に関心をもち，様々な遊びや生活に取り入れることを楽しんでいる。
D－f・F－c 清掃活動に参加し，自分も地域の一員として役に立つ喜びを感じながら，海を大切にしようとする気持ちを抱いている。</td></tr>
<tr><td colspan="3">c 海産物の調理工程を見学したり実際に食したりする体験をし，食への関心を高めている。

A－b・B－b 様々な出会いや体験，発見を楽しみながら海で遊ぶおもしろさや不思議さに気付き，海に対する親しみの気持ちを感じている。
A－b・D－f 体験したことや，様々な気付き，思いを遊びに取り入れ，言葉やいろいろな方法で表現したり，疑問に感じたことを調べたり解決したりする楽しさを味わっている。
A－a・B－b 生き物探しを楽しみ，見たり触れたり観察したりしながら遊んでいる。
A－a・A－b・D－c 海に関わる仕事をする人と関わり，様々な仕事の様子を見たり体験したりしながら，親しみと憧れの気持ちを抱いている。
A－a・B－a 見たり聞いたり触れたりした海産物を食す機会を通して地域の海の豊かさや，海の恵みや命をいただくことへの感謝の気持ちを感じている。
A－a・C－c 海での遊びや体験から様々な海の違いに気付いたり，地域の人や専門家と関わる中で海水の温度差によって捕れる魚や生き物にも違いがあることに気付いたりしている。</td><td>a 昔から伝わる地域の海にまつわる場所や，お祭りや太鼓・獅子舞等にふれ，遊びを通して海に関する伝統文化に触れている。
b 散歩や地域の方の話を聞く機会等を通し，過去に起きた地域の災害について関心を示している。</td><td>a 現在と昔では地域の様子や人が変化していることに気付いている。
c 海での体験や 専門家の話，絵本，動画等を通して気付いたことを， 友達や家族と一緒に考えたり，できることに取り組もうとしたりしている。
b，d なし</td></tr>
</table>

「海洋リテラシー for 気仙沼」の縦のつながり（系統の目安）R4仮置き

小学校 低学年	a　海と触れ合い，様々な生き物がいることに気付きながら，更に見たり触れたり調べたりしようとしている。 a　海との関わりを喜び，地域の自然の魅力を感じている。 b　自分なりの言葉で，海がどのような場所なのかを表現している。	a　海の生き物の名前やすむ場所などに興味をもち，特徴を調べようとする。 b　生き物毎に，何を食べて大きくなっているのかに興味をもち，進んで調べようとする。 c　自分たちの健康を守ってくれる海の幸に感謝しながら，給食を食べている。 d　海に関わる仕事がたくさんあることを知り，それらは自分たちの生活になくてはならないものだと感じている。	c　気温の変化に伴って海水温も変化し，生き物に影響を与えていることを理解している。	a　気仙沼で水揚げされる魚の種類や量の多さを知り，漁業について興味をもつ。 c　自分たちの地域には，どのような漁業，養殖関係の仕事があるのかを知る。 d　まち探検等で，地域の中の海に関わる物や人等を探そうとする。 e　他国の人も気仙沼で海に関わる仕事をしていることを知り，世界と自分たちの地域がつながり，人々が関わり合っていることを感じている。	a　昔から伝わる地域の海にまつわる場所や，お祭りや太鼓・獅子舞等，遊びを通して海に関する伝統文化を体験し，楽しんでいる。 b　過去に起きた地域の災害について知り，家族から話を聞いたり調べたりして，自分ごととして捉えようとしている。 c　身の回りには，どのような災害対策物があるのか知り，興味をもっている。	a　現在と昔では地域の様子や住む人が変化していることに気付いている。 b　地域の暮らしや人々の生活が海と強く結びついていることに気付いている。 c　地域には海に関わる環境の変化に困っている人がいることに気付いている。 d　なし
小学校 中学年	a　進んで海を体験したり，既に知っていることを基に語り合ったりしながら，気仙沼の海への関心を広げている。 b　海の恵みにはどのようなものがあるかについて語り合い，海に対する思いを絵や文章で表現している。	a　海が育む生き物を知り，身体の特徴やえさ，住みか等の関係に関心をもっている。 b　海には様々な大きさや色や形をした生き物がいることを知り，それらの生き物に共通しているところや違うところを調べて記録している。 c　食における海の恵みに感謝し，普段口にする海の食べ物を残さず食べようとしている。 d　水揚げされた海産物が，海に関わる様々な仕事や気仙沼の食を支えていることを理解している。	a　気仙沼の位置を地図上で確かめ，土地の様子を理解している。 b　なし c　海水の温度によって見られる生き物が異なること，また，現在海水の温度が上昇し問題となっているという事象を具体的に捉えている。 d,e　なし f　地震の後には津波がくる可能性があることを授業や伝承施設等での体験を通して理解している。 g　なし	a（魚市場やうみねこ漁業館等の水産関連施設を見学して，）気仙沼で水揚げや養殖されている魚や水産物について理解している。 b　海に携わる方々の思いや願いに触れ，海からの恵みに感謝し，海を守っていこうという思いをもって行動につなげている。 c　気仙沼では昔から漁業や養殖業がさかんなことを知り，伝統を受け継いできた漁師さんの思いや願いに気付いている。 d　水産業以外にも海と関わる様々な仕事があることを知り，それらが互いに関わり合いながら地域の暮らしを支えていることを理解している。 e　気仙沼漁港には，他県からの船も水揚げをするために数多く入港し，地域の食を支えていることに気付いている。	a　伝統芸能を体験したり，伝統行事について調べたりして，気仙沼には海との暮らしの中で受け継がれてきた文化（技術や習わし，言葉など）があることに気付いている。 b　過去に起きた災害による被災の状況と復興の歩みを知り，自分たちにできることを探している。 c　地震・津波などの災害から身を守るための行動について知り，訓練等で実行している。 d　気仙沼が東日本大震災という未曽有の災害から復興したことを知り，震災を伝える施設や活動があることに気付いている。	a　気仙沼のまちは，昔から住んでいる人と様々な場所や国からやってきた人によって，日々新しくなっていることに気付いている。 b　地域や気仙沼市の行事・イベントに進んで参加し，住んでいる地域やまちの良さを体験的に理解している。 c　身の回りには海を取り巻く様々な課題があることに気付き，自分にできることを考えようとしている。 d　食べている物や身の回りのものから外国とのつながりに気付いている。

「海洋リテラシー for 気仙沼」の縦のつながり（系統の目安）R4仮置き

小学校 高学年	a　地域の海やそこに関わる人への関心を深め，自ら進んで海を体験しようとしている。 b　気仙沼の海の魅力に気付き，他の人に伝えようとしている。	a　海は海の中の生き物だけではなく，陸上の生き物の生命ともつながっていることを理解している。 b　海と生命のつながりを具体的な例を示して説明している。 c　海が育む生命が人間を支えていることを理解している。 d　気仙沼市の水揚げ量や流通を知り，気仙沼だけでなく県内外の食を支えていることを実感している。	a　気仙沼の人々が住み続けてきた土地の特徴について様々な資料や実体験を通して理解している。 b　気仙沼の内湾や三陸の海の豊かさの仕組みについて，講話を聞いたり実験等を行ったりすることで理解を深めている。 c　海の状況の変化を捉え，地球規模な視点で考え，自己の行動変容につなげている。 d　海の状況の変化に目を向け，海水の性質の変化とそれがもたらす影響を理解している。 e　海洋に生じる様々な変化について調べ，その原因を理解している。 f　海洋の変化と気象災害とのつながりについて理解している。 g　海と自分や社会のつながりを知り，何ができるのかを発信している。	a　地域に根付く食材の多くが海の資源であることに気付く。 b　海の資源と環境を守るために，自分にできることを考えている。 c　地域の漁業や養殖業について理解し，これからのより良いあり方について調べたり，考えたりしようとしている。 d　気仙沼に住む人の暮らしが海の様々な仕事によって支えられていることを理解している。 e　海を生かす産業を通じて、気仙沼が他地域や他国の人々とつながっていることを知る。	a　伝統芸能を体験したり，伝統行事について調べたりして，気仙沼には海との暮らしの中で受け継がれてきた文化を後世に残す大切さに気付いている。 b　過去に起きた災害による被災地の状況と復興の歩みを知り，風化をさせない取り組みや，伝える行動について考えている。 c　地域の人々が災害対策のために形成した文化や知恵を理解し，自ら実践しようとしている。 d　気仙沼が東日本大震災という未曽有の災害から復興したことを知り，震災を伝える施設を見学したり，活動に参加したりすることで理解を深めている。	a　産業などにおいても多様な地域や国の人々の流れによって日々新しいものが生まれていることを理解している。 b　海との共生を目指す気仙沼のまちづくりとその実現に関わる地域の人々を知り，様自分にできることを考えようとしている。 c　海とのつながりをもつ地域の課題や原因，背景について考え理解しようとしている。 d　産業や経済の流れが，世界の人々の生活に大きな影響を与えていることを理解している。
中学校	a　教科の授業とつながりをもち，生態系について理解するとともに，海と共存していく大切さに気付いている。 a　地域の方との交流を通し，海を大切にする心を育んでいる。 b　気仙沼の未来を担う者として，暮らしている地域の現状と向き合っている。		a　震災からの復興するまでの人々の様子や土地利用について調べ，海がもたらした様々な影響を理解している。 c　広い外洋の海流の仕組みや特徴について，地域の海と比較しながら理解し，意見交流をしている。 d　物質の性質を知り，変わりゆく海水の性質とそれがもたらす影響を理解している。 e　水質調査等を計画し，海がどのような状態かを調べ，その原因を整理し，まとめている。 f　海洋の変化と気象災害のつながりについて理解し，自らの行動決定に生かしている。 g　海と自分や社会のつながりをについて理解し，考えたことをもとに交流している。	b　地域の方と交流し，地域ごとの海の資源活用について考える。 c　地域の方と交流し，漁業の歴史やを知り，漁師さんの苦労や工夫の価値継承するために大切なことに気付く。 e　気仙沼の産業が，世界のどんな地域を支えているか。また，どんな地域とのつながりが気仙沼の産業を支えているか調べることで理解を深め，気仙沼の産業の持続可能な未来について考えを持つ。	a　地域での催し物に積極的に参加し，伝統芸能を体験したり，伝統行事について調べたりして，気仙沼には海との暮らしの中で受け継がれてきた文化を後世に引き継ぐため，行動しようとしている。 b　過去の災害で変わってきた町の様子を知り，人々の努力や成果を理解し，風化させずに後世に伝えるための行動をする。 c　地域の人々が災害対策のために形成した文化や知恵を理解し，将来起こりうる災害をどのように防災・減災できるか考えている。 d　震災遺構を見学したり，被災地の方々との対話を行いながら，被災の歴史と記憶を後世に伝えるために，中学生にできることを考え実践している。	a　多様な地域や国の人々の流れによって気仙沼が日々更新される中で，普遍的な地域の良さを理解し，自分にできることを考え実践しようとしている。 b　身の回りの人や様々な地域の人との交流を通して，海と共生を目指すまちづくりの目的や内容について知り，自分もその一員として参画しようとする。 c　海との共生を目指す地域の課題や原因，背景について考え，解決策を探り実践しようとしている。 d　世界の貿易や経済の流れが世界の人々のくらしに大きな影響を与えることを知り，持続可能な新しいまちづくりについて提案しようとしている。

海と生きる